

自分の思いを豊かに表現するために

【研究代表者】伊澤真佐子（和歌山大学教職大学院）

【共同研究者】森下まちこ（和歌山大学教職大学院）

中村祐佳子（和歌山市立新南小学校） 米田優介（和歌山市立四箇郷小学校）

茅原真未（和歌山市立四箇郷小学校） 田中美羽（和歌山市立宮小学校）

横井志穂（和歌山市立高松小学校） 楠本真弓（和歌山市立高松小学校）

宇治田乃（和歌山市立小倉小学校）

1. はじめに

新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」にむけて、授業改善を目指した実践が各校で行われている。国語科においても多様な感じ方や考え方に接する中で、考えを深め、判断し、表現する力をつけていかなければならない。その学年で子供たちに付けたい力をしっかりともち、そのために必要な教師の手立てを工夫しながら「自分の思いを豊かに表現するために」のテーマで今年度取り組むことにした。

2. 活動の概要

「自分の思いを豊かに表現する」力を付けていくための中心となる言語活動の設定やワークシート、ノートの使い方などを工夫しながら実践した授業を夏休みに持ち寄った。

1学期の実践から、2年生「たんぽぽのちえ」5年生「千年の釘にいどむ」6年生「時計の時間と心の時間」での実践報告を聞き、導入の工夫、動作化等表現活動の工夫、中心とする言語活動はその単元で適切であったか、などについて話し合い2学期に生かすことにした。

2学期には、大学教員が各小学校に行き、授業を参観してカンファレンスを行った。また、その単元が終われば、適切な言語活動であったかを中心に、学習活動を振り返り成果と課題を話し合ってきた。

ここでは、共同研究者である6人の教諭の実践を報告することにする。

3. 実践から

教材名：「うみのかくれんぼ」（光村図書一年上）

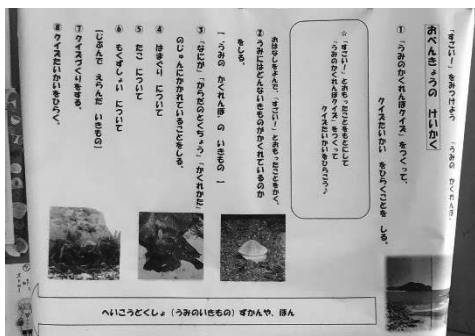
実践者：楠本真弓

単元名：「すごい!」とおもったことをもとにして「うみのかくれんぼクイズ」をつくって、クイズ大会をひらこう♪

「すごい!」をみつけよう、と教室に「おべんきょうのけいかく」を模造紙に書いて貼り、子供たちが学習の見通しをもてるようにした。（図1）

②の「海にはどんな生き物が隠れているのかを知る」では、読み聞かせをして、海の生き物に興味をもたせ、意欲的に学習に取り組めるようにした。『読み聞かせを聞いてすごいと思ったことを書こう』でのノートの記述を下に記す。

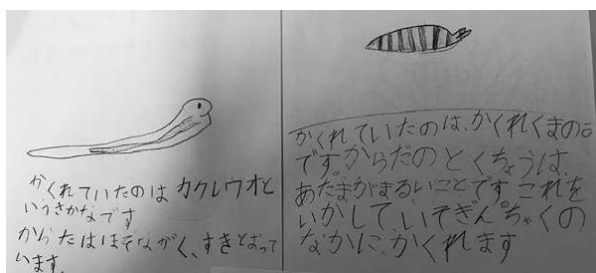
どのいきものもかくれかたがじょうずだし、かくれかたがそれぞれちがっておもしろかった。とくに、カレイがすごいとおもった。なんでかというとおもてのほうをみせていて、てきからにげるのがすごいとおもった。それに、おもてとうらのいろがちがっておもしろかった。



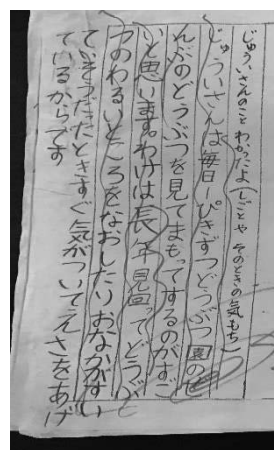
この児童は「かくれかたがじょうず」と表現し「とくに」で、自分が一番おもしろいと思ったカレイをとりあげ、「なんでか」というとで理由を書いている。このような言葉の使い方をほめ、他の子供も感想文を書くときに使えるように掲示等で示して日常の作文でも使えるようにしていくことも大切である。

実践者は大切な文章を順に読んでいないにノートに書く（図1）せている。このとき、「問い」の文と「答え」の文を意識できる書き方を指導し、特に文末表現「でしょうか」にも注目させている。文末表現によりその文の役割も分かるので、文末表現を意識することは読み取りにも、自分で考えたクイズを作る時にも大切になる。

また、ノートに書くときに「なにが」はオレンジ色、「からだのとくちょう」は青色、「かくれかた」は緑色で囲むというふうに全員で統一していた。このことにより、話合いの時にどの文の話をしているかが分かりやすく、文の構造や順番について考えやすかった。3種類の生き物の話が色別で繰り返されるので、分かりやすく表現するには文の順番も大切であること、繰り返しの文章構造などが1年生にもわかりやすかったのではないと思う。



⑦では、図書館で借りてきた図鑑からクイズを作った。「問い」を「なにがどのよう



うにかくれているのでしょうか。」と決め、各自がそれぞれにこの説明文の学習を生かして、「うみのかくれんぼクイズ」を楽しんで作った。

教材名：「どうぶつ園のじゅうい」（光村図書二年上）

実践者：横井志穂

単元名：じゅういさんの一日・わたしの一日

この教材は、説明文であるが、獣医としての思いもよく表れている。そこで、単元のねらいである「文章の大事な言葉や文を書き抜き、自分の知識や経験と結び付けて感想をまとめ、伝えることができる」ために、ワークシートの最後に獣医さんの思いを書き、授業の最後には獣医さんになって動物への思いを語るという、ワークシートと動作化を連動させて表現を豊かにしようと試みた。

実践者は、子供の思考を活発にするために動作化を入れて立ち止まらせたり、黒板に絵を描かせて考えさせたり、登場人物になって会話をさせたりと子供が表現したくなるような工夫を随所に行っていた。

単元のまとめとなる言語活動では、「じゅういさんの一日わたしの一日」として、学校での自分の生活を振り返って一日の係や



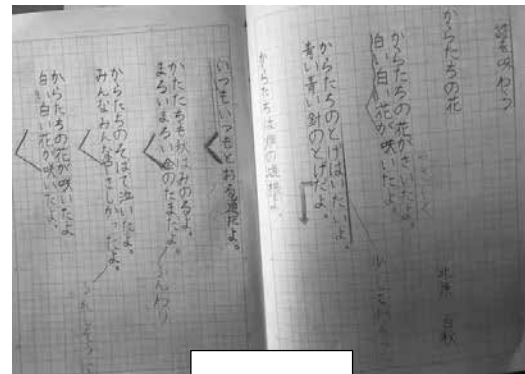
当番の仕事を振り返って書いていた。何気なくしていた日直の仕事でも、みんなのためになっているという気付きがあり、もっとこうすればいいのではないかという工夫も見つけていた。自分の仕事と獣医さんの仕事を比べて意味づけているなど豊かに表現する姿が見られた。

教材名：「からたちの花」(光村図書五年)

実践者：宇治田乃

単元名：詩を味わい音読の工夫をしよう

この詩は六連二行で構成された詩であり、比喻や反復などの表現の工夫もされていて言葉のリズムがよい。大正時代に発表された詩であるため、現在の児童には理解が難しい部分もあるが、優れた叙述について、自分なりの理解や想像によって内容を捉えさせられる詩である。詩の読み取りを音読に結びつける形で学習活動を組み立てていた。また、前日にノートに詩を写し、読みの宿題を出していた。



音読の工夫

実践者は、授業開始前までに黒板に詩を全部書いていた。授業の最初、詩を追いつき読み、2グループに分けて交代読み、気に入った一文を読むだけこの読みと形態を変えながら4回全員で音読し、「どんなことに気が付きましたか。」と発問していった。以下授業記録である。

- C 誰かに話しかけているみたい。
- C 最初の二行と最後の二行は、いっしょ。最後に「よ」とついているので優しい感じ。
- C 一行目で花のことを書いていて、二行目で花の様子を書いている。
- C 二行のうち、右が問いかけ、左が答えみたいな感じ。
- C 「からたちの花のそばで泣いたよ。みんなみんなやさしかったよ」だけ違う感じ。
- T これは？
- C いじめられた。 C 花が枯れた。 C お母さんに叱られた。
- C 絶対にショックを受けている、何か悲しいことがあった。
- C 後ろの二行はもう一回咲いたってこと。
- C 泣いたのは、花が咲いてよかったという涙で、やさしかったのは世話をした人たち。
- T 読む人の想像によるところがあるからそれぞれいいよ。自分の想像したことを大事にして読んでみて。

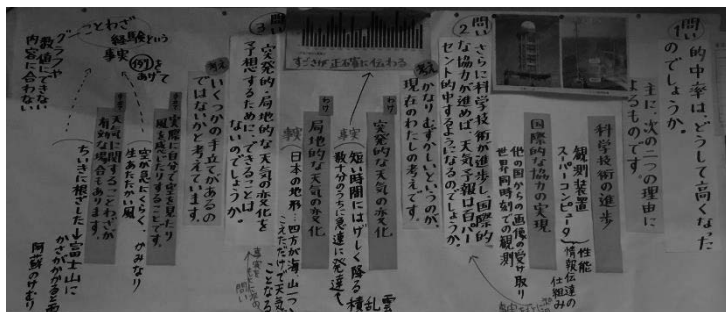
上記のように一人一人の感じ方を言語化して共有すると詩の解釈が整理されたり広がったりする。その後、音読の工夫に入っていた。そして「参考に音読の記号を配るよ。」と音読の記号の意味を教え、「読み方の工夫とその理由を書いてください。」と言うと子供たちは集中してノートに書いていた。繰り返しの速度、間の取り方、強弱や抑揚など、それぞれが自分の想像したことを音声化して表現する工夫をしていた。

詩から感じたことを発表したり友達の意見を聞いたりして想像し、声に出して読むことで自分の読みを豊かに表現して詩を味わっていた。童謡・唱歌としても知られている詩なので、最後にビデオを観て歌を聞き、作者の北原白秋と作曲家の山田耕作の話聞いて授業を終えた。

教材名：「天気を予想する」（光村図書 五年）

実践者：田中美羽

単元名：説明のしかたの工夫を見つけ、話し合おう。そして、理由付けを明確にして表現しよう。

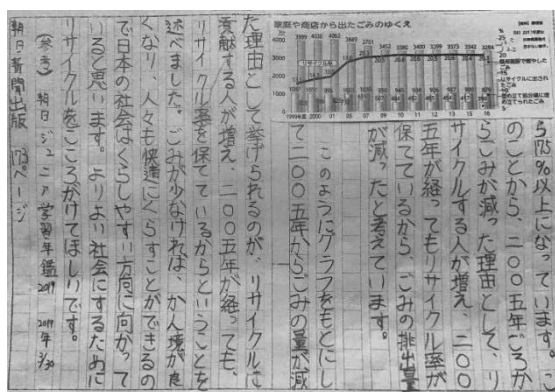


（写真2） いて資料を使って学習した掲示も教室に残してあり、この単元と関連付けられた。

この単元では、書くことが苦手な子も 400 字詰め原稿用紙 1 枚以上書くことができた。これは、モデル文を参考にしたことにもよるが、教師の手立てとして、何を使って自分の考えを伝えるのか、いつでも見て分かるように 1 枚で文章がかけられるような型を掲示物で示したこともある。（写真2）実践者は「一学期から、これからの時代にデータの活用は重要であり、見た目の印象に左右されず、データを正しく読み取って自分の考えをもつことを大切にしたい実践を行ってきたが、この単元で実際に自分で図表やグラフを使って説明文を書くことで、これまでのことが実感としてつながったようだ。」と語っていた。

表やグラフを使う良さを子供は「正確に伝わる」「事実と分かる」「細かいところの変化までよく分かる。」と言い、「説明文では、曖昧なことではなく事実をのべることが大事。図表があることで読者に強く事実であることが伝わる。」「グラフや表を使うことで、読む人も読みやすい。書く人も書きやすい。」「詳しい数字（注目させたい数値）を書いて、その数値から分かることを考えていくことが大切で、これからはしていきたい。」と書くことに意欲をもてた。

文章を書くのが苦手な子も、グラフがあればそれを根拠に、その情報が何を示しているかを捉え、その上で注目する言葉や数字を引っ張り出し、増減の理由を考え、結論づけていくという書き方がわかる。実際に子供たちは、自分の考えが書きやすいグラフを朝日ジュニア年鑑や子ども年鑑 2019、社会科資料集から見つけ、モデル文のように大きい出来事から小さな出来事に話を移していくことを意識して表現できるようになりつつある。



＜統計資料を根拠に、意見を書く＞



＜書いたものを読み合い助言し合う＞

教材名：「笑うから楽しい」「時計の時間と心の時間」（光村図書 六年）

実践者：米田優介 茅原真未

単元名：『教えて、みんなの心の時間～共感？反対？筆者の主張～』

光村図書の教科書は、三年生以上で学年最初の説明文単元を二教材で構成している。見開きで全文を見渡せる第一教材で読み取り方を習得し、より長く、やや構造が複雑な第二教材で、学んだ力を活用し定着を図ることをねらっている。六年生では、「筆者の意図をとらえ、具体例を挙げながら自分の考えを説明する」という学習課題を確認し、第一教材「笑うから楽しい」で構成を捉えて要旨を把握した後、授業者が「自分はどうかな。」と問うと、

C 筆者の考えに反対で、作り笑いとか無理に笑っても楽しくならない。

C 筆者と違って、私は楽しくもないのに笑えない。

C 楽しいことをしていると、自然に笑える。

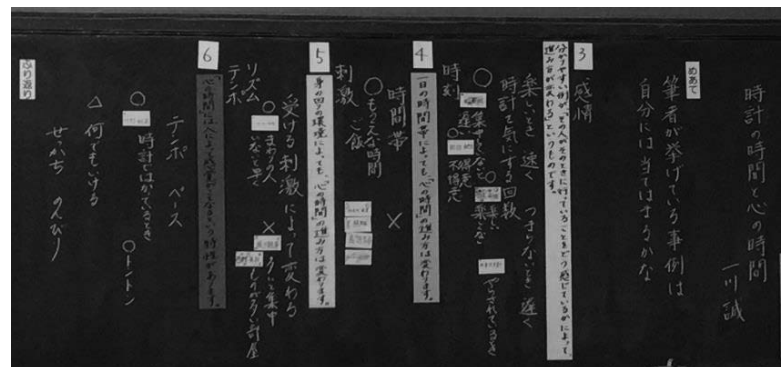
など、筆者の考えに対して読者としての反応を返していた。

第二教材「時計の時間と心の時間」でも、「筆者が挙げている例は自分に当てはまるかな。自分編を書きましょう。」と右のよ

うに③感情例④時刻例⑤刺激例⑥テンポ例を共感○反対×としてワークシートに書き、事例に対する自分の考えをもった。その後、ペア、全体と共有していった。このように、教材文や事例を身近な経験などの自分のことと結び付けて考えられるようにすることで、意欲的に学習に臨めるように単元を設定していた。

自分の考えを具体的に述べる
ことができる視点を与えること
で自分の意見を表現する力をつ
けていこうとする実践であった。

テンポ	刺激	時刻	感情	事例の活用
×	○	×	○	共感・○ 反対・×
	テンポは、リズム感や速さ、遅さを表す言葉や表現のこと。	時刻は、時間や瞬間を表す言葉や表現のこと。	感情は、気持ちや感情を表す言葉や表現のこと。	事例は、筆者の主張を支持する例や、反対する例を挙げる。



4 まとめ

先日、経済協力開発機構(OECD)の国際的な学習到達度調査(PISA)の結果が公表された。前回調査から大きく順位を落としたと言われている「読解力」。経年変化をみると

1. 目的に応じて情報を探して読む力
2. 複数の情報を比較して文章を評価する力
3. 読んだことを元に自分の考えの根拠を示して説明する力

これらについては、以前からの変わらぬ課題である。

「読むこと」の言語活動は、読んで終わりではない。読んだうえで発信することが大事、つまりいかに質の高い言語活動を設定するかということが大事なのである。

6つの事例が現場の先生方の授業改善の一助となれば幸いである。